

「イメージ奏法」を応用した 幼児から児童期のピアノ演奏指導法

—— ピアノ演奏指導の中で行う音楽の可視化による創造力と論理的思考の育成 ——

企画・司会：武本京子（愛知教育大学）
話題提供：神谷舞（名古屋音楽大学アカデミー）

1. 「イメージ奏法」とは

「イメージ奏法」とは、武本京子が考案し、確立した楽譜に記載された音符や演奏記号などを解釈した音楽を「言葉、色、表現曲線、物語、絵」などで視覚化しながら、五感を使って演奏するピアノ演奏法及び教育法である。音楽を可視化させながら教育を行うことにより、音楽による直観力や感性を磨かせ、全体を構成する論理的思考の育成ができる。

2. 幼児から児童期のための「イメージ奏法」によるピアノ演奏指導法

幼児期、児童期の音楽教育は、心身の健やかな成長には欠かせない。「イメージ奏法」を応用した幼児から児童期のピアノ教育では、ただ音を鳴らし、技術を追い求めるのではなく、音楽から受けるイメージを膨らませることに教師と生徒が協働で行うことに重点を置き、発想力や感性を育み、集中力を持続させ、音楽表現する目的や楽しさを体感させることを目的としている。

1) 教師の実演から子どもの発想力を導く

「イメージ奏法」の実践①では、楽曲分析は、ピアノ教師自身が「イメージ奏法」の理論により音楽的要素を考察し、作曲者の描きたい世界を理解し、そのイメージに沿った教師の実演を通して、子どもの発想力を導く工夫を行う。生のピアノの音色に触れ、心身で音楽を感じる波動の効果により、子どもは、音楽から受けるイメージを膨らませることができ、感性が豊かになり、発想力を引き出す。耳の発達す

る幼児期から「イメージ奏法」を実践して演奏することにより、様々な音色を自分自身で感じ、聴き分けることができる。実践では、じっとしていない生徒、練習しない4、5歳児の生徒たちが、教師の演奏を聞きイメージを膨らませることができレッスンに集中して取り組めるようになった発表があった。

2) 「イメージ楽譜」の制作

「イメージ奏法」実践②では、音楽からイメージする絵や物語を指導者と一緒に作成し、楽譜に着色することにより、情景や感情を言葉や絵で表現し、子どもの想像力が豊かになることを目的とする。

「イメージ語表」やイラストなどを用いて、その子どもの持つイメージを引き出しスマホの画像検索などで、イメージを具体化させて可視化することを指導者と生徒が協働で行う。音楽を可視化する過程で全体をどのような気持ちで演奏するかを考え、音楽が創る感情の流れを把握できるようになる。実践では、7、8、9歳児が音楽からイメージする絵や物語を作成することで、子どもの想像力が豊かになり、練習意欲が出たと発表があった。

3) 空間認知を感じるための表現曲線

「イメージ奏法」実践③では、音楽が創り出す立体的空間や呼吸法を表現曲線と着色で可視化することにより、音楽を立体的に感じ、創造力を育てることができる。実践では、10、11歳児の創造力が高められた発表があった。

4) 具体的奏法

「イメージ奏法」実践④では、イメージする情景

や感情を音色で表現するための具体的奏法を指導者と生徒の協働作業で決定する。これらは、打鍵のスピードや音圧のかけ方などに変化を与えて音色を創り出す。実践では、イメージ画像を活用した5,7歳児の練習意欲を引き出し、表現力が豊かになったとの発表があった。

5) ICTを使った音楽の可視化

「イメージ奏法」実践⑤では、11,12歳児へのイメージ映像を制作する指導例の発表があった。小学校でもコンピューターが導入されていることから、イメージの映像化と言語化を自由自在に行っている。個性が強く、感受性が豊かで、独自の世界を持つ児童が、三善晃作曲、《波のアラベスク》の心の内面に迫り、音楽に対して素晴らしい発想を持ち、音楽表現の目的を定めることに成功している発表であった。

3. 幼児から児童期の子どものピアノ演奏指導に「イメージ奏法」を導入した効果

①音楽からイメージする絵や物語を指導者と一緒に作成することにより、主体的で豊かな感性と創造力を育てることができた。②音楽を可視化する過程で全体をどのような気持ちで演奏するかを考え、音楽が創る感情の流れを把握できる論理的思考を育てることができた。③耳の発達する幼児期から「イメージ奏法」を実践して演奏することにより、様々な音色を自分自身で感じ、聴き分けることができた。④個性を尊重し多様性を重視した教育を行うことで、子どもが自分に自信を持てるようになったことがあげられる。

4. 考察

「イメージ奏法」を応用した幼児から児童期のピアノ演奏指導法では、教師と生徒が協働でイメージの可視化から演奏技術の方法まで一緒に行うことがポイントである。そのディスカッションの中から創

造力と論理的思考の育成ができるのだと思われる。

5. 質疑応答

質問：生徒と教師の考えが違った場合、どのように対処するか。

回答：生徒のイメージを尊重するが、楽曲分析し、音楽的要素を考えた上で教師が判断する。

質問：ブルグミュラー25の練習曲をピアノ初歩者に取り入れる場合、「表現曲線」の使い方がわからない。

回答：「表現曲線」は音楽の立体的空間を表し、それを音色で表現するために打鍵のスピードや重さのかけ方を工夫する。「表現曲線」は、ブルグミュラー25の練習曲の武本のワークブックを参考にするといよい。

質問：まだ技術のない幼児にも実践できるのか。

回答：技術のない幼児も、教師が具体的奏法を示すことにより、模倣することができる。

質問：教師のイメージの押し付けにならないか。

回答：「イメージ語表」などは、イメージを膨らませるための足がかりとして用いる。子どものイメージを尊重することに重点を置いている。

引用・参考文献

- 武本(旧姓・中田)京子(1995)『生徒と先生のための「楽曲イメージ奏法」』ドレミ楽譜出版社, pp.1-95.
 武本京子(2013)『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」解説書』音楽之友社, pp.1-40.
 武本京子(2013)『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」によるワークブック—ブルグミュラー25の練習曲—』音楽之友社, pp.1-48.
 武本京子(2019) 楽譜から音楽の内容を復号する「イメージ奏法」の展開—音楽を理解し表現意欲を高める指導法—愛知教育大学研究報告68, pp.11-19.
 本研究は科研費(18k00206)の助成を受けている。
 文責：武本 京子(愛知教育大学)